平成25年度　特集展示（会期：平成25年11月23日（土・祝）～12月27日（金））

# 彦山・宝満山の本末争論

## －近世英彦山の古文書３－



## はじめに

北部九州に、大霊山の双璧として君臨する英彦山と宝満山。この両山は中世以来、それぞれを「胎蔵界」・「金剛界」とする修験道の大霊場であり、互いに独立しながらも「金胎両部両峯」として結節し、修験者が峯入りをし合う密接な関係にありました。ところが江戸時代の17世紀、徳川幕府が諸宗教の本末組織化を推進する中で、両山も本山・末山関係をめぐって争論を引き起こします。本展示では、この江戸時代の彦山・宝満山の本末争論について、彦山座主（首座僧）家に伝わった古文書資料からご紹介します。

※享保14年（1729）以前は「彦山」、以後は「英彦山」と称しました。

## 1　彦山と宝満山の本末争論

（１）修験道の本末制度について

徳川幕府は慶長18年（1613）、修験道法度を制定し、修験者が本末の筋目に従って本山派・当山派のいずれかに所属し、その統制のもとに峯入り等の宗教活動を行うことを定めました。これにより、山岳社寺に依拠し、武力集団としても活動した修験集団は、聖護院を本寺とする本山派と、醍醐の三宝院を本寺とし、当山十二正先達を中核とする当山派のいずれかに所属することとなりました。この制度が地方にまですぐに徹底されたわけではありませんが、17世紀の後半には彦山・宝満山にまで波及しました。

（２）両山本末争論のきっかけ

そのような中、福岡藩では明暦年間（1655-58）に、藩内の修験道を取り仕切る「惣職」に、博多の明厳院を指名しました。しかし古い由緒を誇る宝満山はその配下になることに反発し、「金胎両部」の彦山に協力を求めます。この時の使者が彦山の「末山紛れ無き」との一筆に判形したことで、逆に彦山からその末山と主張されることになりました。

（３）宝満山・彦山と聖護院

これに対して宝満山は、真っ向否定します。特に17世紀後半になると、宝満山では本末組織を拡大する聖護院の末山となり、その強力な後ろ盾を得て、乱世による荒廃から復興を遂げんとしていました。そのために衆頭・平石坊が聖護院門主の峯入りに供奉するなど、積極的に関係の強化を図っていきました。

宝満山の聖護院への接近、末寺化に彦山は強く反発します。その背景には、実は彦山自身が聖護院との本末争論を抱えていたことにありました。聖護院による末寺化拡大の波は彦山にも及んでいたのです。両者の争論は、幕府寺社奉行の裁定にまで及び、結果的には、元禄8年（1695）に彦山は「別山紛れ無し」との全面勝訴を得ました。

（４）争論の結末

聖護院との争論を終えた彦山は、福岡藩の働きかけもあり、宝満山との争論を終息させる方向に動きます。以前のとおりに法儀を守り、互いに峯入りを行うならば、本末の関係には触れない、という条件で元禄9年10月、両山は和睦するに至ります。以後、江戸時代を通じて、宝満山は聖護院の末山、彦山は「別本山」ながら、「金胎両部」の関係が継続されました。

## 2　展示資料

（１）宝満山平石坊書状写

宝満山の衆頭平石坊が彦山に宛てた書状の写し。明暦年間（1655-58）に明厳院が福岡藩における修験の「惣職」となった際、これに反発した宝満山は彦山に助力を求め、宝満山の財行坊・山仲坊が“彦山の末山”との「一筆」に判形しました。これを以て彦山は、宝満山を自らの末山と主張します。これに対して平石坊は、その一筆は自分に「相談無」く「謂われ無」いとし、本末関係について「古来の如く」と抽象的な表現を用いて否定しています。

（２）彦山惣中口上之覚

彦山が福岡藩寺社奉行に宛てた請願書の控え。宝満山を末山と主張する彦山は、宝満山が修験道本山派の本山・聖護院に接近し、その末山となることを警戒しました。ところが貞享２年（1685）夏、平石坊を始めとする宝満山伏が、聖護院門主の峯入りに供奉したことが判明します。展示箇所では、聖護院門主の入峯に供奉したものの、聖護院末山ではないこと等を約した、平石坊・長床中判形の一筆を彦山宛に調えるよう仰せ付けられたいとしています。

（３）福岡藩寺社奉行返答之覚

（２）の請願書の返答。争論は急転直下、終息に向かいます。福岡藩は平石坊を尋問中、奉行に対して不届きがあったとして下山逼塞（ひっそく）を命じます。また財行坊・山仲坊もこれ以前に離山・坊名断絶となっており、宝満山側の争論の“種”を廃することで解決を図りました。本末関係については、明暦期の「一筆」は「反故（ほご）」とし、福岡藩は「俗家」であり本末を裁決すべき立場にないとして結論を出さず、宝満山の立場も立てたことで、一応の解決をみます。

（４）彦山長床中申上覚

貞享５年（＝元禄元、1688）に一度終息した本末争論は、元禄６年７月に再び、宝満山座主楞伽院（りょうがいん）が聖護院門主の入峯に供奉したことが彦山に知れたことで再燃します。彦山側は対応策を検討しますが、楞伽院はいまだ都から帰着せず、調べも始まらない状況にあります。「彼方（宝満山）の返答の趣」によっては「惣山如何様（いかよう）に大事にも罷（まか）りなるべき」との表現には、事を重大視して危機感を募らす彦山側の心境が窺えます。

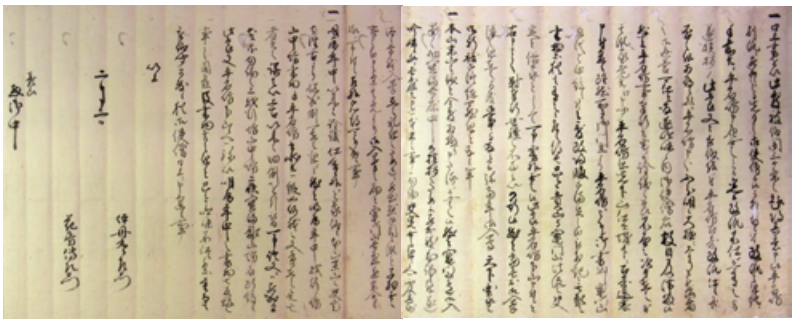
（５）宝満山往来記

元禄６年に再燃した争論に際し、彦山と宝満山、福岡藩寺社奉行のやり取りをまとめたものです。展示箇所は、彦山より福岡藩寺社奉行所に宛てた口上書の案文。楞伽院の聖護院入峯供奉は「古来の規則に違犯し、彦山一峯の修験道義に差閊（さしつか）える」として、宝満山との「義絶」を宣言し、宝満山への峯入りを禁止します。またそれは、決して福岡藩への「疎略」ではなく、「法義の閊（つか）え、黙止し難（がた）」いためであることを弁明しています。

（学芸調査室　一瀬　智）

※本展示・解説シートは森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』（岩田書院　平成21年）を参照したものです。

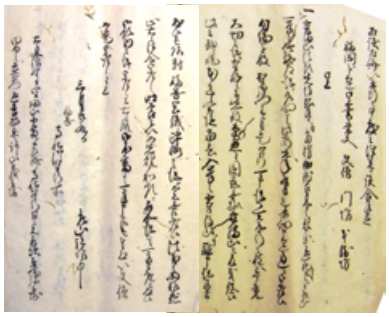
（１）宝満山平石坊書状写（貞享4年（1687）ヵ）



（３）福岡藩寺社奉行返答之覚（貞享5年（1688））

（２）彦山惣中口上之覚（部分・貞享5年（1688））

（４）彦山長床中申上覚（元禄6年（1693））



（５）宝満山往来記（元禄6年（1693））

※いずれも高千穂（上）文書（福岡県指定文化財・添田町所蔵）

編集　　発行：平成25年11月23日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575　FAX 0942-75-7834
URL http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/